

会長 小泉保 事務局 〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町町16-1 関西外国語大学 澤田治美研究
室内 TEL 072-805-2801 (代表) FAX 072-805-2866 E-mail: tanaka@kansai-gaidai.ac.jp (田中廣明宛)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

<http://www2.justnet.ne.jp/~hiro-tanaka/index.htm>

日本語用論学会Newsletter第10号をお届け
します。さる9月23日に、第20回運営委員
会が開かれました。この号は、そこで討議され
た内容をもとに編集されています。

第6回大会ご案内

日本語用論学会第6回大会は、2003年12
月6日(土)神奈川大学・横浜キャンパス・
(221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋
3-27-1 (TEL 045-481-5661 (代)))
(<http://www.kanagwa-u.ac.jp/index1.html>)で別
紙のプログラムの要領で開催されます。

今年度は、研究発表16件とシンポジウム
1件(都合により、講師の一部に変更があり
ました)さらに午前中にワークショップ16
件(うちグループ発表2件(D,E室))が予
定されています。研究発表には応募が22件
ありました。詳しくは、同封のプログラムを
ご覧下さい。

受付について: 現会員、新入会員、
当日会員すべて、受付表にお名前、ご所属などを
お書き下さい。

現会員(会費未納者のみ4,000円)。

新入会員(会費4,000円)。

当日会員(会費:一般3,000円、学生2,000
円)。

の受付すべてで、『プログラム&ア
ブストラクト 2003』(ハンドアウト集)
(1,000円)をご購入下さい。ワークショッ
プ、研究発表、シンポジウムすべてのハンド
アウトが掲載されており、したがって、
これがないと会場には入れません。特に、午
前中のワークショップから来られる方は10
時前後の受付が一番混雑しますので、お早め
にお越し下さい。受付は9時から開けており
ます。

懇親会(会費3,000円)、19号館ラック
スホールにて午後6時半より。

当日の昼食はキャンパス内に食堂が1箇
所だけ開いています(10号館地下食堂)。
学会では、お弁当その他は用意いたしません
ので、学内の食堂をご利用下さい。

学会では、ホテルの紹介はいたしておりま
せんのでご了承下さい。以下いくつかのホテル
の予約サイトです。ご参考までに。

<http://www.jtb.co.jp/sp/> (JTBのホテル予約
サイト) / <http://www.e-htl.com/> (e-Hotel: 旅
行・ビジネスに安心便利なホテル予約サイ
ト) / <http://www2.tabitama.co.jp/index.html> (旅
のたまご: 旅行情報総合サイ
ト) [http://homepage1.nifty.com/digicon/kinki.h
tml](http://homepage1.nifty.com/digicon/kinki.html)

「新横浜駅」から神奈川大学までは、市営地下

鉄「湘南台駅」行き方面に乗り換え、二つ目の駅「片倉町駅」で下車、3番出口を出てすぐ手前の2番バス停で「横浜駅西口」行きに乗り、「神奈川大学入口」で下車、大学まで徒歩5分です。

編集委員会から

『語用論研究』(第5号)は現在編集中です。17編の投稿があり、6編が採用されました。ほかに、昨年の第5回大会のシンポジウムが掲載されます。第5号は会費を納入された方(新入会員、大会へ来られなかった方も含めて)に学会当日ではなく、12月中に事務局より郵送いたします。なお、バックナンバー(創刊号、第2号は売り切れ、第3号、第4号を残すのみ)は1,500円となっております。

会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、大会当日の事務が大変混雑いたしますので、未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。振替用紙が同封されている方は、今年度分(4,000円)が未納の方です。同封されていない方は、すでに納入済みですので結構です。また、2枚同封されている方は、2002年度と2003年度の会費が未納の方です。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い下さい。なお、行き違いがある場合は、ご容赦下さい。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっております。

語用論関係の新刊書紹介

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京：ひつじ書房

Sakita, Tomoko I. (崎田智子) (2003) *Reporting Discourse, Tense, and Cognition.* (Oxford: Elsevier Science) (今年度、市河賞受賞)
山梨正明・有馬道子(編)(2003)『現代言語学の潮流』東京：勁草書房

Forum

語用論的サルの進化

松井智子(国際基督教大学)

2003年、研究休暇中の初夏をドイツのライプツイヒで過ごしました。バッハフェスティバルの最中で、普段はめったに上演されないバロックオペラを聴く機会にも恵まれました。またホワイトアスパラガスのシーズンで、日本での値段を思い出しながら食べるとう一段とおいしさが増したのをおぼえています。さらに、肩こりがひどくなって紹介してもらった町で評判のサウナは、完璧な「混浴」で、日本以外ではイギリスでもっとも長く過ごしたことのあるわたしは、大陸と島国の文化の違い(?)をまた実感させられることになりました。

といってもこの町を訪れたのはバッハ詣でのためではなく、マックスプランクインスティテュートで研究を行うことが目的でした。町が目玉の動物園はこの研究所の施設でもあり、大好きなオランウータンをながめるために足しげく通いました。チンパンジーでも言葉(記号と言ったほうが良いか)をおぼえることができることが広く知られるようになりました。認知心理学者たちの間で、最近、言語を対象とした研究はもうつまらないという風潮が出てきているということを目にしました。なぜかという、言語はもはや人間と他の霊長類を区別するものではないという認識が生まれつつあるからです。そこで、人間と高等類人猿を区別するものは何かというと、それは語用論能力に他ならないという強力な説が出てきています。

この説が正しければ、近い将来、語用論がこれまでにない脚光を浴びることになりそうですが、われわれ語用論研究者は心の準備ができているでしょうか。わたし自身はマックスプランクで、「関連性理論の人たちはみんなでじっとコクーンに入ってるみたいだね」と言われ、そう見えなくもないか、と反省し、何とか進化しなくてはと励んでいるところです。

では、第6回大会に、たくさんの方が参加していただけるようお願いしております。

(事務局 澤田治美・田中廣明記)